

# ラプンツェル

グリム

中島孤島訳

青空文庫



むかしむかし夫婦者があつて、永い間、小児が欲しい、欲しい、といい暮しておりました。やつとおかみさんの望みがかなつて、神様が願いをきいてくださいました。この夫婦の家の後方には、小さな窓があつて、その直ぐ向うに、美しい花や野菜を一面に作った、きれいな庭がみえるが、庭の周囲には高い塀が建廻されてるばかりでなく、その持主は、恐ろしい力があつて、世間から怖がられている一人の魔女でしたから、誰一人、中へはいろいろという者はありませんでした。

或る日のこと、おかみさんがこの窓の所へ立つて、庭を眺めて居ると、ふと美しいラプンツェル（菜の一種、我邦の萵苣（チシャ）に当る。）の生え揃つた苗床が眼につきました。おかみさんはあんな青々とした、新しい菜を食べたら、どんなに旨いだろうと思つと、もうそれが食べたたくつて、食べたたくつて、たまらない程になりました。それから、毎日毎日、菜の事ばかり考えていたが、いくら欲しがつても、逆も食べられないと思つと、それが元で、病氣になつて、日増に痩せて、青くなつて行きます。これを見て、夫はびつくりして、尋ねました。

「お前は、まあ、何うしたんだえ？」

「ああ！」とおかみさんが答えた。「家の後方の庭にラプンツェルが作つてあるのよ、あれを食べないと、あたし死んじまうわ！」

男はおかみさんを可愛がつて居たので、心の中で、

「妻を死なせるくらいなら、まア、どうなつてもいいや、その菜を取つて来てやろうよ。」  
と思ひ、夜にまぎれて、塀を乗り越えて、魔法つかいの庭へ入り、大急ぎで、菜を一つかみ抜いて来て、おかみさんに渡すと、おかみさんはそれでサラダをこしらえて、旨そうに食べました。けれどもそのサラダの味が、どうしても忘れられない程、旨かつたので、翌日になると、前よりも余計に食べたくなつて、それを食べなくては、寝られないくらいでしたから、男は、もう一度、取りに行かなくてはならない事になりました。

そこで又、日が暮れてから、取りに行きましたが、塀をおりて見ると、魔法つかいの女が、直ぐ目の前に立つて居たので、男はぎよつとして、その場へ立ちすくんでしまいました。すると魔女が、恐ろしい目つきで、睨みつけながら、こう言いました。

「何だつて、お前は塀を乗り越えて来て、盗賊のように、私のラプンツェルを取つて行くのだ？ そんなことをすれば、善いことは無いぞ。」

「ああ！ どうぞ勘弁して下さい！」と男が答えた。「好き好んで致した訳ではござい

ません。全くせつぱつまって余儀なく致しましたのです。妻が窓から、あなた様のラプンツェルをのぞきまして、食べたい、食べたいと思いつめて、死ぬくらいになりましたのです。」

それを聞くと、魔女はいくらか機嫌をなおして、こう言いました。

「お前の言うのが本當なら、ここにあるラプンツェルを、お前のほしだけ、持たしてあげるよ。だが、それには、お前のおかみさんが産み落した小児を、わたしにくれる約束をしなくちやいけない。小児は幸福になるよ。私が母親のように世話をしやります。」

男は心配に氣をとられて、言われる通りに約束してしまった。で、おかみさんがいよいよお産をすると、魔女が来て、その子に「ラプンツェル」という名をつけて、連れて行ってしまいました。

ラプンツェルは、世界に二人と無いくらいの美しい少女になりました。少女が十二歳になると、魔女は或る森の中にある塔の中へ、少女を閉籠めてしまった。その塔は、梯子も無ければ、出口も無く、ただ頂上に、小さな窓が一つあるぎりでした。魔女が入ろうと思ふときは、塔の下へ立つて、大きな声でこう言うのです。

「ラプンツェルや！ ラプンツェルや！

お前の頭髪を下げておくれ！」

ラプンツェルは黄金を伸ばしたような、長い、美しく、頭髪を持って居ました。魔女の聲が聞こえると、少女は直ぐに自分の編んだ髪を解いて、窓の折釘へ巻きつけて、四十尺も下まで垂らします。すると魔女はこの髪へ捕まって登って来るのです。

二三年経って、或る時、この国の王子が、この森の中を、馬で通って、この塔の下まで来たことがあります。すると塔の中から、何とも言いようのない、美しい歌が聞こえて来たので、王子はじつと立停まって、聞いていました。それはラプンツェルが、退屈凌ぎに、かわいらしい声で歌っているのです。王子は上へ昇って見たいと思つて、塔の入り口を捜しましたが、いくら捜しても、見つからないので、そのまま帰って行きました。けれどもその時間いた歌が、心の底まで泌み込んで居たので、それから、毎日、歌をききに、森へ出かけて行きました。

或る日、王子は又森へ行って、木のうしろに立って居ると、魔女が来て、こう言いました。

「ラプンツェルや！ ラプンツェルや！

「お前の頭髮を下げておくれ！」

それを聞いて、ラプンツエルが編んだ頭髮を下へ垂らすと、魔女はそれに捕まって、登つて行きました。

これを見た王子は、心の中で、「あれが梯子になつて、人が登つて行かれるなら、おれも一つ運試しをやつて見よう」と思つて、その翌日、日が暮れかかった頃に、塔の下へ行つて

「ラプンツエルや！ ラプンツエルや！」

お前の頭髮を下げておくれ！」

という上から頭髮がさがつて来たので、王子は登つて行きました。

ラプンツエルは、まだ一度も、男というものを見たことがなかったので、今王子が入つて来たのを見ると、初めは大変に驚きました。けれども王子は優しく話しかけて、一度聞いた歌が、深く心に泌み込んで、顔を見るまでは、どうしても気が安まらなかつたことを話したので、ラプンツエルもやつと安心しました。それから王子が妻になつてくれなしかと言ひ出すと、少女は王子の若くつて、美しいのを見て、心の中で、

「あのゴテルのお婆さんよりは、この人の方がよつほどあたしをかわいがつてくれそうだ



の手に剪刀を執つて、ジヨキリ、ジヨキリ、と切り取つて、その見事な辮髪を、床の上へ切落してしまいました。そうして置いて、何の容赦もなく、この憐れな少女を、砂漠の真中へ連れて行つて、悲みと嘆きの底へ沈めてしまいました。

ラプンツエルを連れて行つた同じ日の夕方、魔女はまた塔の上へ引返して、切り取つた少女の辮髪を、しっかりと窓の折釘へ結えつけて置き、王子が来て、

「ラプンツエルや！ ラプンツエルや！」

お前の頭髪を下げておくれ！」

と言うと、それを下へ垂らしました。王子は登つて来たが、上には可愛いラプンツエルの代りに、魔女が、意地のわるい、恐らしい眼で、睨んで居ました。

「あつは！」と魔女は嘲笑つた。「お前は可愛い人を連れに来たのだから、あの綺麗な鳥は、もう巢の中で、歌つては居ない。あれは猫が攫つてつてしまつたよ。今度は、お前の眼玉も掻るかもしれない。ラプンツエルはもうお前のものじゃア無い。お前はもう、二度と、彼女にあらうことはあるまいよ。」

こう言われたので、王子は余りの悲しさに、逆上させて、前後の考えもなく、塔の上から飛びました。幸いにも、生命には、別状もなかつたが、落ちた拍子に、茨へ引掛

かつて、眼を潰してしまいました。それから、見えない眼で、森の中を探り廻り、木の根や草の実を食べて、ただ失くした妻のことを考えて、泣いたり、嘆いたりするばかりでした。

王子はこういう憐れな有様で、数年の間、当もなく彷徨い歩いた後、とうとうラプンツェルが棄てられた沙漠までやって来ました。ラプンツェルは、その後、男と女の双児を産んで、この沙漠の中に、悲しい日を送って居たのです。王子は、ここまで来ると、どこからか、聞いたことのある声が入ったので、声のする方へ進んで行くと、ラプンツェルが直ぐに王子を認めて、いきなり頸へ抱きついて泣きました。そしてその涙が、王子の眼へ入ると、忽ち両方の眼が明いて、前の通り、よく見えるようになりました。そこで王子は、ラプンツェルを連れて、国へ帰りましたが、国の人々は、大変な歓喜で、この二人を迎えました。その後二人は、永い間、睦まじく、幸福に、暮しました。それにしても、あの年寄った魔女は、どうなつたでしょう？ それは誰も知つた者はありません。





# 青空文庫情報

底本：「グリム童話集」富山房

1938（昭和13）年12月12日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：鈴木厚司

2005年3月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# ラプンツェル グリム

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

著者 中島孤島訳

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>